

「無意識の偽善者」の行為論

—平塚らいてうの出発期思想から—

大家慎也

はじめに

夏目漱石がその作家活動を通じて取り組んだテーマの一つに、“無意識の偽善者”という問題がある。漱石によればこの言葉は、意図せずに（つまり無意識に）道徳観念を欠いたように行為する者を指す。漱石は自ら考え、自ら行動する近代的個人としての新たな日本人像を模索していた。したがって、そのような人間像に反する、無意識に振る舞い、他者に影響してしまう人間をどう扱うか——特にその人間は道徳的に正しいか否かという問題は、彼にとって深い意味を持っていたのである。漱石の時代から約一世紀を経た現代においても、この問題は重要性を保ち続けている。私たちは、無意識の偽善者の行為とその道徳性について、どのように考えればよいのだろうか。ところで、この無意識の偽善者のモチーフとなった人物の一人が、思想的に出発期にあった平塚らいてうであったことはそれほど知られていない。彼女は若くして独自の思想を持ち、漱石に筆を執らせる理由の一端となった。筆者は本発表において、若きらいてうの思想を追い、無意識の偽善者の行為、そしてその道徳性を理解することを試みる。

無意識の偽善者 (Unconscious Hypocrite)

『三四郎』（明治41年、1908年）のヒロイン、美禰子は不思議な女性である。漱石は彼女を、無自覚のままに男性を翻弄する女性として描いているのであり、また同時にその翻弄者としての自分に迷いを抱える女性としても描いているのである。こうした美禰子の性質を、漱石は“無意識の偽善者” (Unconscious Hypocrite) と呼ぶ。無意識に誘惑する素振りをする者というのが、ここでいう無意識の偽善者の意味である。

しかし興味深いことは、この無意識の誘惑者のモチーフが単に運命の女性像に留まらず、『三四郎』から『それから』、『門』へと続く漱石の前期三部作を貫くテーマの一つ、すなわち人間の主体性と道徳のかかわりに深く関係していることである。主体的に考え、主体的に行動する近代的個人が他者と交わるとき、そこに道徳的な行為が要求される。他者と共にあるうえで、人は自らの行為に責任を持つ、道徳的存在であらねばならない。しかし、この行為が無意識のものであったとしたら、どうであろうか。その人物は道徳的規範といかに折り合いをつけるのだろうか。美禰子の人物造形は、このような問題の上にあると言える。私たちは、無意識の偽善者の行為の道徳性を、どのようにして問うことができるのであろうか。

ところで、この美禰子が若き平塚らいてうをモデルとしていることはそれほど知られていない。『三四郎』連載開始のちょうど半年前、らいてうは漱石の弟子であった森田草平という青年と心中騒動を起こしている。この事件の背景には、(あたかも『三四郎』の美禰子のように) 森田を無意識に誘惑するらいてうがあった。これに興味を持った漱石がヒロインとして彼女を作中に登場させようと試みたのである。言い換えるならば、美禰子はらいてうの誘惑行為に対する漱石なりの解釈であった。すると、この心中事件を探り、当時のらいてうの思想と行動を追うことで、私たちは無意識の偽善者の行為の道徳性に迫ることができるのではないか。

煤煙事件と若きらいてうの思想

若き平塚らいてうと漱石門下の若き文学青年、森田草平との心中未遂事件は、煤煙事件（塩原事件とも）と呼ばれている。しかし、この事件は単なる情死未遂事件として処理するにはあまりに不可解な点が多い。特に奇妙な点はらいてうの行為そのものにある。心中事件における彼女の立ち位置は誘惑者のそれである。すなわち森田は妻子ある身でありながら年下のらいてうに惹き寄せられ、彼女との関係に耽溺してゆく。しかし、森田とのインタラクションにおけるらいてうの行為を見てみると、不思議なことに、その行為は多分に森田に影響され、引きずられる、受動的なものであったことが解る。そして、このらいてうの受動性のおかげで森田はますますらいてうにのめり込んでゆく。煤煙事件のらいてうは言わば受動的な誘惑者なのである。

森田は、師の漱石がそうしたように、小説『煤煙』においてこの誘惑者らいてうを解釈しようと試みる。師・漱石の解釈との一番の相違点は、平石典子が指摘するように、らいてうの誘惑が意識的な矯飾であるとした点で

あろう¹。森田にとって、らいてうは無意識の偽善者ではない。『煤煙』を貫く色調は、自覚的に男性を翻弄する運命の女と、その女に翻弄され打ち負かされる男性という一種のマゾヒズムの美学である。しかし、この解釈は、彼女の受動性をうまく説明しておらず、また彼女を常識の世界から乖離したイレギュラー的存在にしてしまう。

らいてうの行為について、私たちに何か手がかりは残されていないか。幸運なことに、当時のらいてうは、煤煙事件における自身の振る舞いについて説明を試みている。彼女の説明が見られるのは、「小説に描かれたモデルの感想」(明治43年、1910年、以降「感想」)²として『新潮』に掲載されたインタビュー記事においてである。「感想」において、らいてうは、森田が結局自分のことを理解しておらず、小説に表現できていないとし、自分自身を説明するために“同化”という言葉を用いて、「私は相手の態度と、その時の心持で、上下左右何(ど)うにでも変る人間です、物に触れ、事に応じて、それに向化して予(しま)うのです」³と述べる。すなわちらいてうは、物に触れ、事に応じて——すなわち自己の外界にある事物や他者と関係を持つたびごとに——それらに沿ったかたちで自己を同化させることこそ、自らの為したことであるという。私たちはここに、誘惑者としてのらいてうの本質を見る。すなわち森田を誘惑していたらいてうは、文字通り森田に乗っいたらいてうだったのである。煤煙事件のような破壊型の恋愛関係とは実に、森田がそうありたいと望んだ恋愛関係そのものであった。言い換えれば、らいてうを“誘惑者”にしたのは森田自身のマゾヒズム的欲望それ自体だったのである。つまるところ、同化においてらいてうは中身を持たない鏡だったのであり、その鏡面に映るものは周囲の人々の態度であり、欲望であった。

しかし、鏡のような人間とは、ただ相手の意のままになる無意志の人ではないだろうか。このような疑問を想定してか、らいてうは先の文章に続けて、他者に触れてその他者と同化してしまいがちながらも、その上で無為(禪における永遠不変の真理)の状態になり、この同化それ自体を客観視することが肝要であると説く⁴。「本当の意味の客観は、物に同化しながら而もその間に余裕があって自ら観(み)得る、其場合にのみ出来ることでしょう」⁵。私たちはここで、らいてうが二種類の自己の概念を使い分けていることに気づかされる。すなわち、一方には、他者環境に合わせて現れる自己が存在する。この自己は他者に同化し、他者に合わせるかたちで行為する。しかもう一方には真の私という自己があり、これは先の自己が他者環境に同化するさまをモニターしているのである。この二つの自己について、暫定的に前者を“仮の自己”、後者を“真の自己”と呼びたい。

まとめにかえて——無意識の偽善者の行為論

漱石のいう無意識の偽善者とは何か。その行為とその道徳性についてはどのように理解すべきだろうか。本発表において、私たちは出発期の平塚らいてうが持っていた思想の観点から、ひとまずこの問いに答えることができそうである。つまり、漱石が“無意識の偽善者”(unconscious hypocrite: 意図せざる演技者)と名づけた行為者は、らいてうの場合は、他者の文脈に沿った仮の自己であった。例えば森田という人間の態度に応じ、仮の自己はその姿を表す。そのさまが、漱石の目には意図せざる演技として映ったのである。このような、偽善的=演技的な仮の自己という考え方は、実は私たちにとってなじみの深いものでもある。

しかし、このような偽善的=演技的な仮の自己という考え方は、その行為の道徳性について考察するに際し、困難を抱えることとなる。他者関係における行為が他者との同化によるものであり、偽善=演技なのだと考えることにより、その行為の責任の所在を画定することが困難になってしまう。実際に若きらいてうは森田に引きずられるままに雪山まで赴き、殺し殺される一歩手前にまで至ったのである。このような道徳性の問題については、私たちはまだ十分な回答を得ていない。無意識の偽善者の行為の道徳性は、また改めて問われねばならないだろう。今後の課題としたい。

¹ 平石典子「ダンヌンツィオを目指して——森田草平『煤煙』における新しい若者像」、『文藝言語研究 文藝篇』第43巻、2004年、6-11頁を参照。

² 平塚朋子「小説に描かれたモデルの感想」、『新潮』11巻8号、1910年。ちなみにらいてうの本名は「平塚明(子)」であるが、森田は『煤煙』において彼女を「真鍋朋子」の名で描いた。このインタビューの筆名は、森田の表記を受けた、「我こそ平塚明(らいてう)＝真鍋朋子なり」という身分証明である。

³ 同上、68頁。なお、引用文中の旧字体は新字体に改め、仮名づかいも改めた。以下同。強調は筆者。

⁴ 同上。強調および亀甲括弧による補足は引用者。

⁵ 同上。